

# 一九三六年ロスアンジェルズ・セロリ・ ストライキと日系農業コミュニティ

松 本 悠 子

【要約】 一九三六年のロスアンジェルズ近郊の農業ストライキは、メキシコ系、日系を中心とする少数派民族集団の労働者と日系農民との間の争議であった。この少数派民族集団間の争議は、長引く不況のなかでのエスニシティと階級の関わりを鮮明に提示している。農業労働者たちは、エスニック・ユニオンを基礎として、労働条件の改善を要求した。一方、日系農業コミュニティの側は、エスニシティを基礎とした階級縦断的な団結によって解決しようとしたが、結果として日系農業コミュニティ内の階層分化が表面化した。しかし、それはあくまで日系人の枠内での対立であり、エスニシティをこえた動きとはならなかったのである。ニューディール期のアメリカ社会では、エスニシティの重要性は低下したというのが一般的な見方である。しかし、カリフォルニアにおいて、ニューディール体制の枠組から外された少数派民族集団の農業労働者や農民は、エスニシティの枠内に留まりながら、時にエスニシティを基盤として、各々の経済的利害を守ろうとしたのである。

史林 七五巻四号 一九九二年七月

## はじめに

大恐慌とニューディール期、人々の関心はもっぱら経済問題にあり、民族及び文化的問題への人々の関心が大きく後退したためエスニシティはその重要性を急速に減じたといわれてきた。移民史及び民族集団史においても、エスニシティの枠を越えた労働運動の進展が強調されるなど、一九三〇年代は各民族集団のコミュニティが自律性を維持しながらも、ニューディール体制に統合されていく時期として概ね論じられてきた。<sup>①</sup>しかしながら、少なくともカリフォルニア農業にお

いて、経済的不況はエスニシティのもつ意味を先鋭化させている。本稿では、ロスアンジェルス近郊における日系農民対象のストライキに焦点を当てて、大恐慌期アメリカにおける民族集団史のもう一つの側面を明かにしたい。

一九三〇年代は、アメリカの歴史において、最も農業労働者のストライキが頻発した時代である。特にカリフォルニアでは、参加した労働者の数と流血の惨事によって全国の注目を集めた大ストライキが何度かあった。大ストライキ以外にも、一九三〇年代の間に百四十のストライキが州全体で起こり、一九三六年、州の緊急救済委員会は「カリフォルニア農業の歴史は……概ね労働争議の歴史である」と報告している。この労働争議の歴史のなかで注目すべき事実は、日系農民を対象とした争議が南カリフォルニアを中心として行われたことである。ロスアンジェルス郡救済委員会は次のように述べている。「南カリフォルニアにおいて、メキシコ系農業労働者とその雇用者との間で起こっている軋轢は、ほとんど日系農民と労働者との間で起こっているものである」<sup>④</sup>。特に一九三三年のエルモンテ・ストライキと一九三六年のいわゆるロスアンジェルス・セロリ・ストライキは、その規模とその地域に及ぼした影響の大きさによって人々の注目を集めた。では、何故、日系農民を特定したストライキが行われたのであろうか。本稿では、このようなストライキにおける少数派民族集団間の対立に注目することによって、複数の人種民族集団を内包する一九三〇年代のカリフォルニアの農業及び社会がかかえていた問題の一端を明かにしたい。

これまでの一九三〇年代の農業ストライキを扱った研究は、大規模な農場にのみ焦点を当て、当時の農場での労働争議は、工場での争議、すなわち大資本と賃金労働者との間の紛争と同じであると論じる傾向にある。日系農民が言及されているとしても、雇用者側の社会的及び経済的条件の違いが労使関係にどのような影響を与えたかという点にはあまり関心が払われてこなかったように思われる。<sup>⑤</sup>

一方、日系人の歴史のなかで戦前の日系農業を扱った研究の多くは、白人社会からの排斥にも関わらず日系農業コミュニティがその同質性及び民族的団結の強さによっていかに「成功」をおさめたかを強調してきた。ボナシチ(Erna Bonacich)

とモデル (John Modell) は、民族的団結によって日系コミュニティ内の階級対立は妨げられたと述べ、フギタとオブライ  
ン (Fugita & O'Brien) は、一九三〇年代の農業ストライキにおける日系コミュニティの「エスニックコミュニティによ  
る対応」を民族的団結の強さの例証としている。このような議論は、カリフォルニア農業における日系農業コミュニティ  
の特殊性或は例外性を強調することとなる。たしかに、日系農民はエスニシティを基礎とした組織をつくり、その指導者  
は民族的団結を呼びかけた。また、一部の日系農民は民族的団結に依存した流通システムを開発した。しかしながら、後  
述のごとく一九三六年のストライキに見られる日系農民及び日系農業労働者の対応は、日系コミュニティの民族的団結に  
関して我々に異なった視点を提供してくれるのである。

さらに、これまでの研究の多くは社会学或は日米交流史の枠組で論じられてきたこともあって、多人種民族社会におけ  
る日系社会の位置付けにはあまり関心が向けられていない。白人社会との関わりについても、排斥された被害者として日  
系人を扱うか、或は「与えられた立場 (Given)」のなかでのエスニックコミュニティの活動に焦点を当てる研究が多く、白  
人社会とのダイナミックな関わりは視野のなかにあまり入っていない<sup>⑦</sup>。しかも、白人社会との関わり以上に、他の少数派  
民族集団と日系人との関わりには焦点が当てられてこなかった。一九三〇年代の日系農民は、人種差別の対象であったと  
同時に、より経済的に弱い立場の他の民族集団の雇用者でもあった。社会学的研究では、日系農民はエリート層とより社  
会的に低い地位のグループとのあいだの「緩衝域 (buffer)」となったと論じているが、それが具体的になにを意味するか  
は明かではない<sup>⑧</sup>。

したがって、本論では、白人優越体制の枠組のなかで、どのように日系農民が白人農民と関わり、同時に日系及び他の  
民族集団の労働者に対応したかを辿ることによって、多民族の存在が一九三〇年代のカリフォルニア農業の労使関係にど  
のような影響を与えたかを考え、多人種民族社会としてのアメリカ合衆国の歴史を見直す契機としたい。

① 例えば志郷晃祐「アメリカカ史における移民」今津晃・池本幸三・高

橋章編『アメリカカ史を学ぶ人のために』(世界思想社、一九八七年)

〇三頁。

- ② Stuart Jamieson, *Labor Unionism in American Agriculture* (Washington: U. S. Dept. of Labor, Bureau of Labor Statistics, 1945, reprint, New York: Arno Press, 1976) pp. 17, 32-35. 全米二州州では一九三〇年代に二七五件の労働争議が繰り出された。
- ③ California State Emergency Relief Administration, *Migratory Labor in California* (Sacramento, 1936) p. 55.
- ④ “The Report of Los Angeles County Relief Administration and the Work Progress Administration under the Direction of Dr. Towne Nylander” (1936), Carey McWilliams, *Factories in the Field: The Story of Migratory Farm Labor in California* (Boston: Little Brown Books, 1939, reprint ed., New York: Arno Books, 1969) p. 248. 四五頁。
- ⑤ McWilliams, *op. cit.*, p. 286; Paul S. Taylor and Tom Vasey, “Contemporary Background of California Farm Labor” *Rural Sociology* Vol. 1, No. 4 (December, 1936) p. 401; Jamieson, *op. cit.*, p. 7; Alexander Morin, *The Organizability of Farm Labor in the United States* (Cambridge: Harvard U. P., 1952) pp. 81-82; 泉田正徳著、丹尼爾・E・ダニエル、*Bitter Harvest: A History of California Farmworkers, 1870-1941* (Ithaca: Cornell U. P., 1981)

その中で最も重要な資料は以下の通りである。

- ⑥ John Modell, *The Economics and Politics of Racial Accommodation: The Japanese of Los Angeles, 1900-1942* (Urbana: University of Illinois Press, 1977) pp. 125-126; Edna Bonacich and John Modell, *The Economic Basis of Ethnic Solidarity: Small Business in the Japanese American Community* (Berkeley: University of California Press, 1980) p. 65; Stephen S. Fugita & David J. O'Brien, *Japanese American Ethnicity: The Persistence of Community* (Seattle, University of Washington Press, 1991) pp. 58-59; Roger Daniels, “Japanese America, 1930-1941: An Ethnic Community in the Great Depression” *Journal of the West* Vol. XXIV, No. 4 (Oct, 1985) p. 47. 泉田正徳著、例として、矢野龍典編「南カリフォルニアの労働者」第二次大戦前の日本人農業と民族的組合組織『地産雑誌』九二巻（一九八三）八四頁。
- ⑦ 泉田正徳 Modell, *op. cit.*, p. 125.
- ⑧ David J. O'Brien and Stephen S. Fugita, “Middleman Minority Concept: Its Explanatory Value in the Case of the Japanese in California Agriculture” *Pacific Sociological Review*, Vol. 25 No. 2 (April, 1982) p. 196.

## 一 背 景

### 1 一九三〇年代のカリフォルニア農業における労使関係

カリフォルニア農業は市場向けの商品作物を集約的に生産し、とりわけ一九二〇年代以降、野菜や果物などの蔬菜類の

生産が急成長していた。このようなカリフォルニア農業の特色のひとつは、農業労働者の存在である。一九三〇年、カリフォルニアでは、農業に従事しているものの五七%が賃金労働者であった。全国平均が二六%であるから、いかにカリフォルニア農業が農業労働者に依存しているかが解る。① 当時の工場労働者と比較しても、農業労働者の状況は絶望的であった。全国の農業労働者のなかでは、カリフォルニアの農業労働者の賃金は最高であったが、それでも一九三〇年代の平均日給は二・〇六ドルで、工場労働者の一九三〇年代の収入の二五—三〇%であったといわれる。② この安価な労働力は、歴史的にアジア系及びメキシコ系の諸民族集団によって供給されてきた。一九三〇年の四〇五農場の調査によれば、八四%の農業労働者はメキシコ系であり、六%がフィリピン系、五%が日系であった。大恐慌によるメキシコ系労働者の本国送還運動や西部からの白人労働者の流入にも関わらず、ロスアンジェルス郡では引き続きメキシコ系及びフィリピン系が労働者の主要部分を占めていたのである。③ ちなみに、一九三六年のロスアンジェルスの調査では、調査対象の九三%がメキシコ系農業労働者であり、彼らは年間三〇・七週しか就労出来ず、平均年間総収入は四九一・二ドルであり、その八〇%以上は食料に消えていた。④

農業労働者の歴史は、ある意味では「人種搾取」の歴史である。雇用者の圧倒的多数を占めている白人農民の代表とも言えるロスアンジェルス商工会議所の農業部門の部長は、白人労働者を雇用しない理由を次のように述べている。「白人の移動労働者は扱いやすい労働力ではない。アメリカの市民であるため、彼らはいわゆるアメリカの生活水準を要求するであろう。我々の予測では、彼らはAFLや破壊分子による組織化の格好の餌食となるであろう」と。⑤ 換言するならば、「帰化不能外人」とメキシコからの「出稼ぎ労働者」は最も「扱いやすい労働力」であった。常に労働者は供給過剰の状態にあり、しかも少数派民族集団の労働者は組合の厚い壁に阻まれて、工場への就職は困難であった。政治的にも経済的にも弱い立場で、ワグナー法、社会保障法、労働者災害補償法などの州や連邦の保護も得られなかったのである。さらに、農業労働者の間には賃金と仕事の内容に関して明確な民族集団によるヒエラルヒーが形成されていた。先の商工会議所の

農業部長は、「農場での労働にカーストが存在することを理解しない農民は賃金を払いすぎることになる」と証言している。白人労働者は主に機械の操作や仕分けなどの屋内の作業を行っていた。畑の労働に関しては、日系と白人の賃金ももっとも高く、次はメキシコ系で、フィリピン系と中国系はもっとも低かった。<sup>⑦</sup>慢性的労働力過剰の状態のなかで、民族集団間の競争が行われ、一層労働条件の悪化を招いたのである。

このように農業労働者を大量に使う集約農業においては、大資本を投下するほど利益があがり、すでに多くの研究者が指摘しているように、カリフォルニア農業では、大規模な会社組織の農場が顕著であった。一九三〇年の統計によると、全国の大規模農場の三分の一はカリフォルニアにあり、カリフォルニアの農場の一〇%は一万ドル以上の総収入をもち、州の農業収入の五三%を占めていた。<sup>⑧</sup>しかしながら、数の上では、小規模の農場がはるかに大規模の農場を上回っていたのである。カリフォルニア農業のいまひとつの特色として、いわゆる家族農場以外に、市場向け蔬菜類を栽培する小農が重要な役割を果たしていた事実を見落としてはならない。彼らの多くは、ほとんどの仕事を家族でするが、収穫時に農業労働者を雇わなければならなかった。一九三五年一月の統計をもとに、当時の農業問題の第一人者であったテーラー (Pats Taylor) は、カリフォルニアにおいて、農業労働者の三分の一は十人以上を雇用する大規模農場で雇用されたと、大規模農場の労使関係の重要性を主張している。しかしながら、換言すれば、三分の二の労働者は、それ以下の規模の農場で働いていたのである。しかも、三三・六%の労働者は、三人以下の労働者を雇用する農場に雇われていた。<sup>⑨</sup>したがって、中小規模農場における労使関係をも考察する必要があると考えられる。

## 2 一九三〇年代の日系農業コミュニティ

全米の日系人の四分の三が集まっていたカリフォルニア州においても、一九三〇年、日系人の人口は州人口の二%、日系人の最も集まっているロスアンジェルス郡においても人口の一%を占めるにすぎなかった。<sup>⑩</sup>しかしながら、一九三〇年

代には、白人以外の農民の多くは日系農民であり、特に、近郊市場向けの野菜や果物類の分野では生産の主力となっていた。カリフォルニア州全体では、一九四〇年のカリフォルニアの近郊向け野菜の四〇％は日系農民によって生産されたと報告されている。ロスアンジェルス郡では、市場向け蔬菜類の農場に限れば、ロスアンジェルス郡の農場の三分の二、近郊向けの野菜を栽培している農場の九〇％は日系農民によって耕作されていたと報告されている。<sup>⑩</sup>

農業は日系人にとっても主要な経済基盤であり、一九三〇年の統計では、職業については日系人のうち、五三％は農業に従事していた。農業労働者を加えずに、農民だけに限ると、日本領事館の一九三五年の調査によると、南カリフォルニア州九郡の人口約四万五千人のうち、日系農家は約三千戸であり一万余人が生計を立てていたのである。<sup>⑪</sup>前述のごとく日系農民も蔬菜類を中心とする集約農業を行っていたが、その規模は小さかった。日系農民が耕作している農場の平均面積は四〇エーカーであるが、全国平均は二二四エーカーであった。しかも、一九四〇年の統計では、カリフォルニアの日系農民の七〇％、ロスアンジェルズ郡では、ほぼ九〇％の日系農民が借地農であった。<sup>⑫</sup>このように小規模で、資本の限られている日系農民は、必要な労働力の約半分を家族によって賄っていた。しかしながら、集約農業の常として、収穫時には一度に多量の労働力を必要とする。その大部分を日系労働者だけでなくメキシコ系及びフィリピン系の労働者によって当てていた。特に一九三〇年代は、一世が老齢化し、しかも二世の大半がいまだ学生であったため、外部からの労働力の導入が必要であったといわれる。一九三六年のストライキ直前の調査では、ロスアンジェルズ地域の農業労働者の九〇％がメキシコ系であり、日系農家は総収入の約三分の一を賃労働に払っていた。<sup>⑬</sup>しかも、彼らを雇う際、日系農民も白人農民がつくった賃金差別体系を利用し、より安い労働力としてメキシコ系やフィリピン系の労働者を雇用したのである。『労働新聞』は、一九三三年のエルモンテ・ストライキの際、日本人労働者をスト破りとして導入しておきながら、「ストが済んだら日本人労働者は皆追い出されて墨人労働者を雇い入れた」と日本人農家を非難している。<sup>⑭</sup>

このような日系農民の活躍のかげで、見落とされがちなのが、日系農業労働者の存在である。たしかに、既に多くの研

究者が指摘しているように、農業労働者全体のなかで日系労働者の占める比率は二十世紀初頭に比較すると急速に減少している。しかしながら、日系人口のなかでは、依然として農業労働者の割合は大きかった。農業労働者といっても、借地農をしながら他の農家に労働力を提供しているもの、土地法の網の目をくぐる為に実際は借地農でありながら農業労働者として申告しているものなどを含む可能性があるため、正確な数字を確定することは困難ではある。しかし、ロスアンゼルス<sup>①</sup>の日本領事館の一九三〇年の調査によると、南カリフォルニアの九郡において、有業人口一五二四八人のうち、農業(庭園業、畜産業を含む)が三五一九人、賃金を得ている農業労働者が三四六九人であった。テラーは一九三〇年のセンサスから、カリフォルニアの日系人の農業従事者一九三三三人のうち、農場主及び借地農が三三三五人、管理人及び監督が一六四九人、そして労働者が一四五六九人と算出した。ただし、この数字には、賃金を支払わない家族労働が含まれていると考えられる。<sup>②</sup> いずれにしても、農家戸数と同等か或は上回る数の農業労働者の存在は、一九三〇年代においても、日系農業及び日系コミュニティの特質を考える上で、無視できないであろう。

- ① U. S. Congress, Senate, Subcommittee of the Committee on Education and Labor, *Hearings on Violations of Free Speech and Rights of Labor*, 74th Congress 2d Session-75th Congress 3rd Session (Washington D. C.: Government Printing Office, 1939-1940) (hereafter cited as LaFollette Committee, *Hearings*) pt. 62 (July, 1940) p. 22490; pt. 54 (Jan., 1940) p. 19779.
- ② *Ibid.* pt. 62, p. 22667; Harry Schwartz, *Seasonal Farm Labor in the United States with Special Reference to Hired Workers in Fruit and Vegetable and Sugar-beet Production* (N. Y.: Columbia U. P., 1945) p. 154; Cleus E. Daniel, "Agricultural Unionism and the Early New Deal: The California Experience" *Southern California Quarterly* Vol. LIX No. 2 (Summer, 1977)
- ③ Department of Industrial Relations, State of California, *Mexicans in California: Report of Governor C. C. Young's Mexican Fact-Finding Committee* (San Francisco: Government Publication Department, 1930) (hereafter cited as *Mexicans in California*) pp. 150, 160; Varden Fuller, "The Supply of Agricultural Labor as a Factor in the Evolution of Farm Organization in California" LaFollette Committee *Hearings*, pt. 54 (Jan., 1940) pp. 19855-19856; U. S. Congress, House Select Committee Investigating National Defense Migration, *Hearings*, 77th Congress 2d Session, (1942) (hereafter cited as Tolson Committee, *Hearings*) pt. 29, p. 11741; Carey McWilliams, *Factories in the Field: The Story of Migratory Farm Labor in California* (Boston, 1939, reprint N. Y.,

- Archon Books, 1969) pp. 246-248.
- ④ Carey McWilliams, *op. cit.*, p. 134.
- ⑤ LaFollette Committee, *Hearings*, pt. 53, p. 19696.
- ⑥ *Ibid.*, pt. 47 (1939) p. 1944.
- ⑦ *Mexicans in California* pp. 169-170; Schwartz, *op. cit.*, p. 83.
- ⑧ LaFollette Committee, *Hearings*, pt. 47 (1939) p. 17451.
- ⑨ *Ibid.*, pt. 62 (1940) pp. 22492, 22494; Clark A. Chambers, *California Farm Organizations* (Berkeley: University of California Press, 1952) p. 7; Paul S. Taylor and Edward J. Rowell, "Patterns of Agricultural Labor Migration within California" *Monthly Labor Review* (Nov., 1938) p. 1; Julius T. Wendzel, "Distribution of Hired Farm Laborers in the United States" *Monthly Labor Review* Vol. 45 (Sep., 1937) p. 568.
- ⑩ *The Sixteenth Census of the United States: 1940, Population*, Vol. III p. 567; *The Sixteenth Census of the United States: 1940, Population: Characteristics of the Nonwhite Population by Race*, p. 5.
- ⑪ Tolan Committee, *Hearings*, pt. 29, pp. 11195, 11001; pt. 31, pp. 11674-11675.
- ⑫ Paul S. Taylor and Tom Vasey, "Historical Background of California Farm Labor" *Rural Sociology* Vol. 1, No. 3 (1936) p. 293; 『羅府新報』昭十一・七・一五「日系農業に關する邦語研究」池本幸三「アメリカ史における日本人移民とその農業ロイヤリティ」
- 戸土書院編『シヤンニース・アメリカン』(「ネルヴァ書房」一九八五年)を参照。
- ⑬ *The Fifteenth Census of the United States: Agriculture, 1930*, Vol. III, p. 413; *The Sixteenth Census of the United States: Agriculture, 1940*, Vol. 1, Part 6, pp. 690-691, Vol. III, p. 224; Adon Poli, *Japanese Farm Holdings on the Pacific Coast* (Berkeley: Bureau of Agricultural Economics, 1944) pp. 9-13.
- ⑭ Tolan Committee, *Hearings* pt. 31 (1942) p. 11674; McWilliams, *op. cit.*, pp. 246-247; 『羅府新報』昭十一・三・一四。
- ⑮ 『労働新聞』昭十・十一・二〇 Yoneda papers, Box 152-10 (Japanese American Research Project, U. C. L. A, hereafter cited as JARP) 同新聞社ナントントンクノヤチノ共産党ノ新聞ペーネ米田ノ編集をよぶ。Karl Yoneda, "100 Years of Japanese Labor History in the USA" in Amy Tachiki et. al. eds, *Roots: An Asian American Reader* (Los Angeles: U. C. L. A, 1971) p. 155.
- ⑯ 在羅府日本帝國領事館「管内邦人口統計表」(昭五・十一・一) (JARP) Paul S. Taylor and Tom Vasey, "Historical Background of California Farm Labor" *Rural Sociology* Vol. 1, No. 3, (1936) p. 293, Table VIII; 尚一九三五年の「日本人農園労働者組合創立趣意書」(昭一 一万五千人のペーネ) Yoneda papers, Box 152-16. (JARP)

## 二 一九三〇年代におけるロスアンジェルス周辺の農業ストライキ

### 1 エルモンテ・ストライキ

一九二九年以降の長引く不況により、カリフォルニアにおいても農業、特に市場向けの蔬菜類の栽培は大きな損害を被った。農民のなかには、作物を担保に借金を重ね、作物の値段の下落により労働者に支払う賃金を確保できないものも多かった。特に、機械、肥料などにかかるコストは値下がり幅が比較的少なかったため、市場価格の下落による損失を農民は労働者の賃金切り下げで当てるしかなかった。一九二九年から一九三三年の間に、カリフォルニアの農業労働者の平均賃金は五〇%引き下げられたのである<sup>①</sup>。

このような不況の下で、一九三三年六月、ロスアンジェルスの東に位置するエルモンテのいちご畑において、収穫時期の最中に、メキシコ系、フィリピン系及び日系の労働者がストライキをはじめた。ストライキは急速に周辺の日系農場に広がり、約一五〇〇名の労働者が参加した。メキシコ系の労働者が主要な参加者で、メキシコ本国での日本製品ボイコットにまで波及したのである。一方、各地域の日系農民の組織は、南加中央日本人会の指導のもとに、統一行動をとってストライキと戦うことを決定した。日系農民側は日本人のみを対象とすることに特に不信感をあらわにした。サンフランシスコ平原の日系農民は、白人に対して九時間一ドルで働くのに日本人に対してのみ時間給十五セントを要求するのは不当であると強調している。ロスアンジェルスの日系新聞である『加州毎日』は、ストライキが日本人とメキシコ人の間の「人種戦争」の様相を呈していたと報告した<sup>②</sup>。ほぼ一カ月間のストライキの後に、ロスアンジェルス商工会議所、連邦労働委員会、メキシコ副領事などの仲介により、メキシコ系労働者の組合と南加中央日本人会との間で、日給一・五ドル、スト参加者を可能な限り雇用するという条件に基づいて合意が成立した。しかし、一九三〇年代の平均が二・〇六ドルであったという報告を考えると、この合意は、必ずしも労働者にとって有利なものではなかったといえよう<sup>③</sup>。

この苦い経験は、農民と労働者の両側に組織強化の必要性を認識させた。一九三三年九月、日系農民の各地方組織を恒常的にまとめる中央組織である南加中央農会が設立され、一九三五年には南加農会連盟に発展した。<sup>④</sup>一方、白人農民も集団で問題を解決するために商工会議所とファーム・ビューローが中心となって、農家協会 (the Associated Farmers) のロスアンジェルス支部を一九三三年十一月に結成し、一九三四年に再編成した。この組織は、大規模農業経営者が主であるが、白人中小農も参加しており、ロスアンジェルス商工会議所を窓口とする肥料会社や鉄道の利害とも密接に関わっていた。<sup>⑤</sup>

他方、農業労働者がわも、自らのエスニシティと地域に根ざした組織化を進めた。メキシコ系労働者は既に一九二〇年代後半、ロスアンジェルスを中心に南カリフォルニアの三三の組織をまとめて、メキシコ労働組合連合を結成していたが、ストライキを戦う中で急速に成長した。他の地元の組合を組み入れて、一九三三年七月に、ロスアンジェルスでカリフォルニア州メキシコ人農業労働者組合連盟 (Confederacion de Uniones de Campesinos y Obreros Mexicanos del Estado de California 以後CUCOMと略) を結成するにいたった。一九三四年には、五〇の組織と五千人から一万人の組合員を擁する州で最も活動的な農業労働者の組織の一つとなったのである。<sup>⑥</sup>日系農業労働者も、二十世紀はじめから組織化の努力を続けてきたが、一九三三年のストライキを通じて、南カリフォルニアにより強い基盤を築いた。一九三五年、ロスアンジェルスにおいて、八百人の組合員を擁する加州日本人農園労働者組合が結成されたのである。

## 2 ロスアンジェルス・セロリ・ストライキ

一九三三年に合意に達したといってもロスアンジェルス地域の日系農園における労働者の生活や労働条件は改善されず、労働者達、特に、CUCOMは日系農民に対して絶えずストライキを行うと迫っていた。契約更改時期の一九三五年の夏、両者の間の緊張は高まり、全国労働関係局の支部局長の仲介で米人農家諸団体も参加して何回かの会合がもたれた。今回

は、日系農民の代表として、南加農会連盟の代表が出席した。CUCOMは賃金引き上げと組合員に対する差別の撤廃を要求したが、約八百名の農家を代表する南加農会連盟は、全国労働委員会カリフォルニア支部の定めた最低賃金の維持を主張し、物別れに終わった。<sup>⑧</sup> さらに、席上、日系農民側は、「この種の交渉を日本人団体のみ行ふは不合理である」と主張したが、結局、日系農民対労働者という図式となったのである。

一九三六年一月には、CUCOM、フィリピン労働組合連合、アメリカ農工業労働者組合、加州日本人農園労働者組合など、十一の組合を連合した農業労働者組合連盟 (the Federation of Agricultural Workers' Unions) が結成された。外部活動家の指導もあったが、その主要グループは、ヴェラルデ (William Velarde) 率いるCUCOMであった。<sup>⑩</sup> 同連盟は、一九三六年四月はじめ、南加農会連盟とロスアンジェルス地域の日系農民に対して、賃上げと組合承認の要求を出し、受け入れられなければストを執行すると述べたのである。<sup>⑪</sup> 一九三五年の段階では地方により条件が違ふことを理由に各地方団体が決定すべきだとしていた南加農会連盟は、この段階で統一行動をとることを決定し、上記の要求を拒絶した。<sup>⑫</sup>

一九三六年四月十七日、約三百名の労働者がロスアンジェルス市郊外のヴェニス・セロリ畑でストライキを始めた。四月二十日までに、エルモンテ、トーランスなど周辺地域の日系農場に広がり、約二千六百名の労働者が参加した。参加した労働者の大半はメキシコ系労働者であったが、加州日本人農園労働者組合も労働者がわの要求を伝えるスポークスマンとして重要な働きをした。日系労働者のスト参加者数は明白ではないが、組合員は千人以上になったといわれる。<sup>⑬</sup>

一方、南加農会連盟の会員は約一六〇〇人となり、この時期に会員の必要とする労働力は延べ三千から四千人であった。日系農民の各地方組織は、二世の若者の集団を収穫を迎える地域に派遣するなど、組織的に労働力の確保に努めた。工場労働と農業労働の大きな違いの一つは、生産物が腐りやすく、時期を逸すると出荷不可能になるということである。そのため、日系農民は他の地域の日系農民と協力して、自らの労働力も提供する一方、家族、学校の生徒、都市の家庭婦人を動員し、白人など他の民族集団の失業者と共に収穫を行った。労働の志願者を各地域に分配する特別委員会が設置された

程である。さらに、各地方組織は緊急基金への寄付を集め南加農会連盟に納付した。この基金の約三分の二は「護衛巡査」の警備費に当てられたという。<sup>④</sup>

このような農民の動きに対抗して、労働者は、生産物によって時期の異なる収穫時を狙って、順に移動し、スト破りを排除する為ピケを張った。緊張は高まり、警察当局は強硬措置をとった。組合側によると、保安官代理、ロスアンジェルス警察の「赤化防止班」、ハイウェイパトロールなど約千五百人の武装した警官が動員されたという。例えば、ヴェニスでは、五十人の警官が、百人の二世が収穫を手伝うのを護衛した。いくつかの衝突が報告され、労働者達は負傷し、催涙弾が投げ込まれ、多くの逮捕者がでた。逮捕者のなかには、加州日本人農園労働者組合の委員長と書記も含まれている。五月二五日には、ドミンゲスヒルで武力衝突があり、日系農民も銃を持って参加し、農業労働者組合連盟の指導者の一人といわれるリリアン・モンローが逮捕された。<sup>⑤</sup>

このストライキは、ロスアンジェルス社会全体を巻き込んだのであった。日系人のコミュニティの主な組織、例えば、南加中央日本人会、ロスアンジェルス日本人会、リトルトーキョー商業会、南加日本人商工会議所、日系アメリカ人市民同盟のオレンジ郡およびロスアンジェルス郡支部などが日系農民を支援し、緊急基金に寄付を行った。警察当局、白人農民の組織<sup>⑥</sup>及びロスアンジェルスの実業界も日系農民の立場を支持した。ロスアンジェルス商工会議所は農家協会のロスアンジェルス支部と強いつながりを持ち、全面的支援を表明した。いま一つの白人農家団体であるファーム・ビュローのロスアンジェルス支部は南加農会連盟を訪問し、有力新聞の支持を取り付ける約束をした。<sup>⑦</sup>

他方、五月には、アメリカ労働者総同盟(AFL)のカリフォルニア支部が農業労働者組合連合の支持を公に表明し、南カリフォルニア地区の書記長が仲介のため農会連盟を訪ねた。日系の労働運動の活動家は、一九三六年五月二六日、公開討論会を開催したが、この会には、日本人庭園業者組合、AFL、日本人農園労働者組合、フィリピン及びメキシコ系労働者の代表、市会議員などが参加した。また、共産主義系の組織、アメリカ市民的自由連盟(ACLU)、公共事業労働者



- ⑤ LaFollette Committee, *Hearings*, pt. 68, p. 24976; Clarke A. Chambers, *California Farm Organizations* (Berkeley: U. C. Press, 1952) p. 44; Richard L. Neuberger, "Who Are the Associated Farmers?" *Survey Graphic*, Vol. XXVIII No. 9 (Sept., 1939) p. 520; *Los Angeles Times* の社説の Harry Chandler の農家協会の組織化を積極的に参加しようとするものゝ、同紙の記事は客観的の批評の難い。尚、農家協会とこの誤謬は『羅府新報』に從つた。
- ⑥ たゞこの スタムニーキ初期段階にせよ共産党系の外部活動家の指導なきのこの地域にせよなるもの。 Stuart Jamieson, *Labor Unionism in American Agriculture* (U. S. Dept. of Labor, Bureau of Labor Statistics, 1945) pp. 20, 91, 122; Charles B. Spaulding, "The Mexican Strike at El Monte, California" *Sociology and Social Research* Vol. XVIII (6) (July-August, 1934) p. 575; San Kushner, *Long Road to Delano* (N. Y.: International Publisher, 1975) p. 86.
- ⑦ Karl Yoneda, "100 Years of Japanese Labor History in the USA; in Amy Tachiki et al. eds., *Roots: An Asian American Reader* (L. A.: U. C. L. A., 1971) p. 155.
- ⑧ *Los Angeles Times*, August 13, 1935; G. P. Clements, (manager of Agricultural Department, Los Angeles Chamber of Commerce) "A Brief History of California's Agricultural Labor" (Nov. 4, 1935) in LaFollette Committee, *Hearings*, pt. 53, p. 19675; 「日本人会ドモソノキル支那記録」Box 238-4, p. 266 (JARP); 『羅府新報』一九三五・八・五『加州毎日』一九三五・九・十八。
- ⑨ 『加州毎日』一九三五・九・十。
- ⑩ Jamieson, *op. cit.*, pp. 124-126.
- ⑪ LaFollette Committee, *Hearings*, pt. 70, p. 25855.
- ⑫ 『加州毎日』一九三六・四・一。
- ⑬ 『加州毎日』一九三六・四・二十、『羅府新報』一九三六・六・十八。
- ⑭ 『加州毎日』一九三六・四・二五、四・二八、四・三〇、五・一、五・十二、『羅府新報』一九三六・四・二八、四・三〇、五・九、五・十二、五・十四『*The Los Angeles Times*, May 11, 1936.
- ⑮ Jamieson, *op. cit.*, p. 125; Carey McWilliams, *Factories in the Field* (Boston, 1939, reprint N. Y.: Archon Books, 1969), pp. 244-245; *The Los Angeles Times*, May 26, April 22, April 24, April 25, April 28, 1936; *United Progress News*, May 4, 1936, June 1, 1936; 『羅府新報』一九三六・四・二五、四・二七、五・二六。
- ⑯ 『加州毎日』一九三六・四・二七。
- ⑰ A Letter from R. L. McCourt, President of the Los Angeles Chamber of Commerce to the Associated Farmers of Los Angeles County (July 21, 1936) in LaFollette Committee, *Hearings*, pt. 55, p. 20280; 『加州毎日』一九三六・五・六。
- ⑱ *Los Angeles Times*, May 5, 1936; *United Progress News*, May 25, 1936; 『加州毎日』一九三六・五・二五、五・二六。
- ⑲ 『羅府新報』一九三六・四・二二、五・七、五・八、五・九、五・十一、五・二〇、五・二二、六・八。Jamieson は七月にスタムニーキが終結したと報告するが、七月には一部の農家が契約しただけで組合や南加農会連盟との間では公式に解決すべきなかつたことを八月の連盟の会長自身認めよう。『羅府新報』一九三六・八・八、Jamieson, *op. cit.* p. 125.
- ⑳ LaFollette Committee, *Hearings*, pt. 56 (Jan., 1940) pp. 20115, 20279; 『加州毎日』一九三六・五・二九、六・一、六・二二、*United Progress News*, June 8, 1936; Jamieson, *op. cit.*, p. 126; 『羅府新

報』一九三六・五・二四。

② Jamieson, *op. cit.*, p. 128; LaFollette Committee, *Hearings*, pt.

54 (Jan., 1940) p. 19779

### 三 農業労働者とエスニック・ユニオン

一九三三年及び一九三六年のストライキは、第一に、農業労働者が自らの組織を強化しようとした試みとして捉えることが出来る。二十世紀初頭以来、急進的活動家はカリフォルニアの農業労働者の組織化を試みてきたが、困難な闘いを強いられてきた<sup>①</sup>。しかし、一九三〇年代、ロスアンジェルス地域のメキシコ系及びフィリピン系農業労働者は地域とエスニシティに根ざした自らの組織、すなわちエスニック・ユニオンを発展させていったのである<sup>②</sup>。エルモンテ・ストライキ直後に結成されたCCCOMはロスアンジェルス郡の日系農民との交渉を主導し、一九三六年のロスアンジェルス・ストライキにおいても外部からの活動家の指導はあったものの、フィリピン系、及び日系の各エスニック・ユニオンを連合し、中心グループとしてストライキを闘った。一九三三年のストライキ時と比較すると、一九三六年のストライキにおいて各エスニック・ユニオンの連合という形がより明確に出され、しかも労働者たちは組合承認をより強く要求した。このことは、各組合の基盤が強固になり、しかも、自らのエスニシティを維持したまま他の民族集団の労働者達と連帯することに一時的にせよ成功したことを物語っているのではなからうか。このような動きを背景として、AFLのカリフォルニア支部は一九三七年以降メキシコ及びフィリピン系の組合へ接近を計ったのである。

しかし、ロスアンジェルス郡の日系農業労働者にとって、エスニシティはより複雑に関わっていた。彼らの多くは日系農民に雇用されていたため、経済的利害と日系コミュニティの一員としてのアイデンティティとの間で、日系労働者は揺れていたのである。確かに、一九三五年の加州日本人農園労働者組合の成立は、階級縦断的な民族的団結を基礎とした社会福祉組織では農業労働者の問題を解決できないことを、一部労働者が自覚した結果といえよう。一世の労働者の高齢化

問題に加えて、大恐慌のなかで職をより安いメキシコ系やフィリピン系の労働者に奪われたり、借地代を払いきれない農民など、失業者が増加している状況を反映して、この組合は、集団交渉によって、最低生活に必要な賃金、失業者の保険、及び高齢者への援助を勝ちとることを目標とし、就職斡旋、高齢労働者のための社会福祉事務所の機能を果たそうとしたのである<sup>③</sup>。しかし、同組合の成立は、日系農業労働者がエスニシティより経済的利害を優先したことを意味したわけではなかった。組合の側も、一九三六年のストライキの初期段階では、エスニシティを重視し、その枠内で行動しようとしたのである。時給三〇セントと他の組合の要求よりも幾分安い要求をし、「外人」（メキシコ系とフィリピン系を指す）の要求と自分達の要求とは異なると主張した。さらに、「農園労働者組合連盟加入は、日本人として誠意を示し、又耕作者側の誠意を信じて、差し控える」と、単独で交渉しようとしたのである<sup>④</sup>。

南加農会連盟の加藤新一支配人によるスト指導者への一九三六年の呼びかけも、民族的団結をなによりも優先すべきであるというコミュニティの指導者の立場をあらわしている。「もし日本人同志といふ誠意があるならば、君達少数の人々が他人種過激主義者と手を繋ぎ、墨人や比島人を煽動して日本人農家のみを苦しめるやうな非民族的行為はよし、今直ちにこの争議から手を引き、真の誠意を披瀝すべきであらう<sup>⑤</sup>。」と。しかしながら、交渉の経過は、民族的団結によって同一民族内の経済的利害対立を和らげることが困難であることを明かにした。南加農会連盟は、民族的団結を呼びかける一方、「まづ日本人同志といふ名目のもとに労働者団体を認めさしめ、さらに各人種と全般的交渉をせしめんと計画せるもの外ならぬ」と組合活動に対しては強硬な態度を崩さなかった。実際に、日系コミュニティ内の締め付けは厳しかった。例えば、『羅府新報』は、農業労働者の宿泊するリトルトーキョーの下宿屋間で急進主義と関わりとみられるものには下宿人としての信用貸しをしないという取り決めを結んでいた、と報道している<sup>⑥</sup>。四月末には、南加農会連盟はストライキに参加している人々を、日系労働者を代表しない過激主義者として「同胞社会の公敵」と非難したのである<sup>⑦</sup>。

一九三〇年代の日本における愛国主義の高まりを忠実に反映している日系社会において、「同胞の敵」、「非民族的行為」

という言葉は大きな圧力となったことであろう。にもかかわらず、加州日本人農園労働者組合の書記長は、日系農民の非妥協的態度が他の民族集団との連帯をさせたと述べている。「……我々は同じ日本人同志のこととして従来白人労働組合側の共同戦線申し込みを断ってきたものの、農家側が協調されないもので、この上はやむなく他人種労働組合と共同して交渉に移るべき旨を請願したのに対しても回答なく、遂に米農園労働者組合連盟側の乞いに応じ羅府郡内農園労働賃金値上げ交渉委員会に幹部中より五名の日系市民を代表者に選んで送ることになりました」と。結果として、一九三六年のストライキは、エスニシティを基礎とした階級縦断的団結がコミュニティ内の経済的利害の対立を克服できなかったことを明かにした。従来の研究が日系コミュニティの団結を強調しているにも関わらず、これらのストライキは、日系労働者の利害と指導者の主張とが鋭く対立し、日系コミュニティ内部に階級による亀裂が起こったことを示しているのである。たしかに、積極的にストライキに参加した日系農業労働者は少数派といえるであろう。モデルが指摘するように、指導者の視点からみるならば、少数派に対する強い圧力とコミュニティ内のヒエラルヒーは、「強い経済的動機に裏打された日系コミュニティの団結の証し」<sup>⑨</sup>とまとめられるかもしれない。しかし、少数の急進主義活動家だけではなく、加州日本人農園労働者組合として一般労働者が参加していた事実を忘れてはならない。指導者だけではなく日系人全体の視点にたつならば、このストライキの経過を民族的団結の証しとしてまとめためには、あまりにも多くの人々の活動を切り捨てなければならぬのである。

日系コミュニティ内の階層分化は、ロスアンジェルスの庭園業者のストライキ支持の表明にも明かである。市の日系人有業人口の三〇%近くを占める庭園業者の指導者達は、明確に農業労働者を支持した。ハリウッド日本人庭園組合の指導者の一人である南雲正次は、このストライキを小作人と労働者という「労働者同志の対立」ととらえ、「主義者の煽動」ではなく、「生存権を主張するといふ意義の下に起こしている争議」であると主張している。日系庭園業者のストライキ支持を分析したツチダ(Nobuya Tsuchida)は、「庭園業者の多くが農業労働者出身で土地をもてずに庭園業に転じたものが

多いという背景を、労働者支持の一因として指摘しているのである。<sup>①</sup>

ただし、日系農業労働者と日系コミュニティの他の階層との対立は、日系農業労働者が日系人としてのアイデンティティを捨てて労働運動に参加する契機とはならなかった。日系農業労働者も、あくまでエスニック・ユニオンを核として自らの立場を主張したのである。このように、CUCOMや加州日本人農園労働者組合などのエスニック・ユニオンの成長と活動は、エスニシティがカリフォルニアにおける農業労働者の運動の基礎を提供した事を示している。農業労働者としてニューデールの枠組からはずされ、少数派民族集団として主流社会から孤立した労働者たちは、エスニシティの紐帯を基礎に自らの生活基盤の確保を訴えたのである。

このような労働者層におけるエスニシティの絆が労働運動の拡大を阻害する要因となりうることは、既に多く論じられている。事実、日系労働者の場合、二十世紀初頭のオクスナードにおけるメキシコ系農業労働者との連帯の有名な例があるにも関わらず、一九三〇年代まで総じて組合の組織率が低く、他の民族集団との連帯に成功していたとはいえないと日系の労働運動の指導者たちは報告している。その理由として、『労働新聞』は一世の日本人労働者の「排外的民族主義」が強いことを批判し、カール米田も、日本人労働者の組合組織率が低い理由の一つに、強い愛国主義（米田は「大和魂」と言及している）の為メキシコ系、フィリピン系及び他の少数派の労働者に「誤った優越感」を日本人労働者ももっていたことを指摘している。<sup>②</sup>しかしながら、一九三〇年代の長引く不況は、一時的な民族間の協力を可能にした。一九三六年のストライキにおけるエスニック・ユニオンの連盟は、エスニシティを基礎とした組織の自律性が、ストライキを持続させるための強力な基盤となったことを示しているのである。

① 二十世紀初頭には、I. W. W. がカリフォルニアの農業労働者の組織化を計った。Harry Schwartz, *Seasonal Farm Labor in the United States with Special Reference to Hired Workers in Fruit, Vegetable and Sugar-beet Production* (N. Y.: Columbia U. P., 1945)

p. 71; Charles B. Spaulding, "The Mexican Strike at El Monte, California," *Sociology and Social Research*, Vol. 18, No. 6 (July-Aug., 1934) p. 576.

② ノーリッジ系労働者の労働運動に関しては以下を参照。Howard

Dewitt, *Violence in the Fields: California Filipino Farm Labor Unionization during the Great Depression* (Saratoga, California: Century Twenty One Publishing, 1980). 一九三五年に設立されたフィリピン系労働組合(The Filipino Labor Union)は七支部を擁したが二十人の組合員を擁しなかった。Federal Writers Project, "Unionization of Agricultural Labor in California" (1933) (Typewritten, Bancroft Library) p. 2.

- ③ 「日本人農園労働者組合創立趣意書」(一九三五・四・三) Yoneda Papers, Box 152-16. (JARP)
- ④ 『羅府新報』一九三六・三・三〇・四・三〇。
- ⑤ 『羅府新報』一九三六・五・六。
- ⑥ 『羅府新報』一九三六・三・二七。
- ⑦ 『加州毎日』一九三六・四・二二。

#### 四 白人農民の対応

今回のストライキは日系農民のみを相手としたものであり、ヴェニススのミスマーランチのように、白人地主が日本人農家十数名を率いて組合承認をするところもあったが、概ね日系人農家が雇用者として前面にたち、日系農民の団体の幹部が白人地主に説明し、了解を得るといふ形をとっていた<sup>⑧</sup>。しかし白人農民の組織はこのストライキに全面的に関与したのである。一九三六年四月、ロスアンジェルス・ストライキの勃発と相前後して、農家協会のロスアンジェルス支部が労働争議により強力に対抗するために再編成された。ストライキ勃発と同時に、彼らは日系農民と労働者との紛争に介入することを「アメリカ民主主義の擁護」として正当化し、ロスアンジェルス商工会議所は市長と警察当局に対して日系農民を保護するよう要請した。彼らは、このストライキを共産主義者の煽動と決めつけ、自警行為の必要性を説いたのである<sup>⑨</sup>。

白人農民と実業界の真の目的は、雇用者側が賃金を決める権利を確保することであり、日系農民に組合を認めさせない

⑧ 『羅府新報』一九三六・三・二六。

⑨ John Modell, *The Economics and Politics of Racial Accommodation: The Japanese of Los Angeles, 1900-1942* (Urbana: U. of Illinois Press, 1977) p. 126.

⑩ 『羅府新報』一九三六・五・二五。

⑪ Nobuya Tsuchida, "Japanese Gardeners in Southern California, 1900-1941" Lucie Cheng & Edna Bonacich, *Labor Immigration Under Capitalism* (Berkeley: U. C. Press, 1984) pp. 459-460.

⑫ 『労働新聞』一九三五・二・一五。(JARP)

⑬ Karl Yoneda, "100 years of Japanese Labor History in the USA" in Amy Tachiki et. al. eds, *Roots: An Asian American Reader* (L. A.: U. C. L. A., 1971) p. 155.

ことだった。一九三六年の農家協会ロスアンジェルズ支部事務局長のロスアンジェルズ警察宛の手紙は、白人農業団体が介入する真の目的が組合承認阻止であり、警察を代表とする法的統制機関と強いつながりがあったことを如実に伝えている<sup>③</sup>。なによりも組合承認を阻止するという白人農民の目的は、日系農民の意向と一致していた。供給過剰の市場では、資本の少ない中小農家が、最も労働賃金の引き上げに影響を受けると思われる。そのうえ、小農にとって、ストライキは一年の全収入の損失になりかねないので、日系農民も、はじめのうちは、組合承認には断固とした態度をとる方針をたてていたのである。

しかしながら、このような白人農民の積極的介入は、人種の違いを越えた、利害の一致に基づく連帯であったであろうか。一九二〇年代には、ロスアンジェルズでは、白人農民の組織が排日運動を主導していたのである。例えば、ロスアンジェルズのファーム・ビューローは、一九二〇年に、農業用の土地だけではなく、全ての土地に対する所有或は借用の権利を日本人に対して禁止すべきだと主張した<sup>④</sup>。一九三〇年代に入っても、排除しようとする動きがなくなったわけではない。例えば、一九三五年には、日系農業を完全に禁止しようとする法案が州議会に提出されている<sup>⑤</sup>。このような歴史的背景を考慮するならば、従来の研究のように、白人農民と日系農民の「利害が一致していた」、或は「この地域の白人経済権力機構によって支配されている最も有力な武器に日系農民は頼ることができた」と論ずることは、白人社会との力関係を不明確なものにしている<sup>⑥</sup>。

確かに、一九三〇年代の南カリフォルニアの白人農民と実業界は、日系人に対して排除の論理のみをふりかざしていたわけではなかった。例えば、農家協会の会合には、日系農民の組織から三人の代表が出席した。農家協会はその代表を通じて日系農民に対する発言力を強化しようとしたのである。農家協会のメモには次のような発言が残っている。「加藤氏（南加農会連盟支配人）は、農家協会のロスアンジェルズ郡支部の情報と助言により行動し、モンロウ婦人の共産主義活動の過去を明かにした<sup>⑦</sup>」と。しかし、白人農民の組織は、彼らの組織への日系農民の指導者の参加を認める一方で、さまざま

まな圧力を日系農民に加えた。例えば、ストライキが始まる前の一九三五年の段階で、ファーム・ビュローはCUCOMとの交渉を打ち切るように要請してきた。『加州毎日』によると、ある有力な白人農民は、もし日系農民が交渉を続けるならば、将来の援助はしないと警告したという。⑧ 農家協会のあるロスアンジェルス支部会員は「日系農民に問題を起こさせないようにするにはよく監視する必要がある。……わたしは、アメリカ人側から圧力をかけるのに忙しかった」と証言しているのである。

マックウィリアムスは、ロスアンジェルス・ストライキに関して、「多くの農民が組合の承認を望んでいたにも関わらず、州の大農の組織が圧力をかけて妨害したという点において、このストライキは重要な意味をもつ」と論じている。しかしながら、白人農民と日系農民との関係は、大農と小農の力関係だけではない。日系農民は、少数派民族集団ゆえに、より強い圧力を感じていたのである。一九二〇年代の排日運動と土地法の成立は日系農民の立場を不安定なものにした。排日土地法を回避するために、しばしば白人土地所有者と日系農民は言葉による契約をかわしていた。日系人は、収穫の一部を収入とする支配人となったり、農業労働者として契約をかわし、収益の何パーセントかを得たり、さまざまな方法を講じた。ある例では、白人のエージェントが土地所有者から土地を借り、日系農民の間に分割して、エーカー当たり二・五ドルの手数料をとっていた。いづれにしても、日系農民の立場は不安定で、契約は短期間で自由裁量の部分が多くあり、口頭での契約のため常に追い立てられる可能性があったのである。白人農民の側からすれば、排日土地法とその結果としての日系農民の不安定な立場は、日系農民に圧力をかける強い武器となった。マックウィリアムスは次のように観察している。「問題は、誰が、カリフォルニア州で最も豊かな郡（ロスアンジェルス）において、州で最低の時給二二・五セントの賃金を労働者に払うように日本人生産者に強く求めたかということである。明かに、問題の利害関係者は、外人士地法からの保護を日本人に確約できるほどの力をもっていると思われる」と。⑨ 事実、ロスアンジェルス・ストライキの収拾の目途がつかずに七月を迎えた時、郡検事会議が外人土地法の勵行決議案を州議会に上程することを決定した。ドミン

ゲスヒルでは、白人の土地所有者が、もし日系農民が組合を認めれば、立ち退いてもらうことになると言したのである。<sup>15)</sup>このように、白人農民と警察当局による援助は、実際は、日系農民に対する圧力と支配の試みであったといえよう。たしかに、従来の研究が示しているように、日系農業は、カリフォルニアの農業構造において、その生産物などからみても白人農業の競争相手というより補完的立場にあった。しかし、競争関係が希薄であるからといって、両者の間の摩擦が回避されたり、協力関係になったわけではなかった。農業労働者を必要とする農家として、あるいは生産物の流通、加工者、さらには土地所有者として、日系農場における労働問題は直接白人社会と関わっていた。それゆえ、白人農民の組織は、圧力をかける手段として、人種を理由に排除する論理を使用し、不安定な立場にある日系農民に対して経済的及び社会的支配力を強めようとしたのである。

- ① 『羅府新報』一九三六・五・六・五・一三五。
- ② LaFollette Committee, *Hearings*, pt. 68, pp. 25018-25019; pt. 70, pp. 25839-25840, 25871-25872; Richard L. Neuberger, "Who Are the Associated Farmers?" *Survey Graphic* Vol. XXVIII No. 9 (Sep, 1939) p. 519; 『羅府新報』一九三六・四・二五・五・一五。
- ③ LaFollette Committee, *Hearings*, pt. 70, (July, 1940) p. 25858.
- ④ Masakazu Iwata, "The Japanese Immigrants in California Agriculture" *Agricultural History* Vol. 36, No. 1 (Jan, 1962) pp. 33-34.
- ⑤ Jean Pajus, *The Real Japanese California* (Berkeley: James J. Gillick, 1937) p. 165.
- ⑥ John Modell, *The Economics and Politics of Racial Accommodation* (Urbana: U. of Illinois Press, 1977) p. 125; Roger Daniels, "Japanese America, 1930-1941: An Ethnic Community in the Great Depression" *Journal of the West* Vol. 24, No. 4 (Oct., 1985) p. 37.
- ⑦ A. S. Clark, "Memo on Agricultural Labor Conditions, Los Angeles County, April 1936" in LaFollette Committee, *Hearings*, pt. 70, p. 25869; 『加州毎日』一九三六・五・一。
- ⑧ 『羅府新報』一九三五・七・二二・八・三〇・九・五『加州毎日』一九三五・八・三二・九・五。
- ⑨ 『手紙の日』一九三六年五月一日 LaFollette Committee, *Hearings*, pt. 55, Exhibit 8886, p. 20278.
- ⑩ Carey McWilliams, *Factories in the Field* (Boston, 1939, reprint N. Y.: Arcton Books, 1969) p. 245.
- ⑪ 特田十世邦平の政策と関しつては邦平の著書『*The Story of Japanese Farming in California*』(Berkeley: University of California Press, 1937) p. 33; Edward K. Strong, *Japanese in California* (Stanford: Stanford U. P., 1983) p. 104; Robert Higgs, "Landless by Law: The Japanese Immigrants in California

Agriculture to 1941" *Journal of Economic History*, Vol. XXXVIII

No. 1, (March, 1978) pp. 219-220; タプリー・マッシュイリントス

著、鈴木二郎・小野瀬嘉彦共訳『アメリカの人種の偏見』（新泉社）

一九七〇年）九〇頁、藤井整『NRAの米圃』（加州毎日、一九三四

年）三二〇、三三二頁。

② McWilliams, *op. cit.*, pp. 248-249.

③ Charles B. Spaulding, "The Mexican Strike at El Monte,

California" *Sociology and Social Research*, Vol. 18, No. 6 (July-

Aug., 1934) pp. 579-580; 『羅府新報』一九三六・七・一七・一三

九・一一。

## 五 日系農民とロスアンジェルス・セロリ・ストライキ

このように、労働者と白人農民にはさまれて、日系農民はどのような立場をとったのであろうか。一九三六年のロスアンジェルス郡の日系農場を対象とした農業ストライキは、大資本と労働者の争いではなく、小農と労働者との争いである。日系農民は主張した。日系新聞の『羅府新報』も『加州毎日』も、日系農民のほとんどは雇用者ではあるけれども資本家ではなく、家族全員で朝から夜遅くまで働いてやっと生計が立っている労働者であると論じ、一八%の日系農家は負債を負っていると指摘している<sup>①</sup>。しかし、たとえ労働者と変らぬ状況であることを訴えたとしても、それは日系農民が労働者の立場を理解したという意味ではなかった。「農家も労働者も共に苦境にはありますが、失業すればWPAの補助を受ける労働者の方が農家に比して余程楽な立場にあると思います<sup>②</sup>」というように、土地を生活の基盤とする農民は労働者とは一線を画し、自らの利害を守ることを必要としたのである。そのために、資本の少ない小農として、更に少数派民族集団の農民として、日系農民はなによりも日系人としての団結に目を向けた。労働者の待遇問題に関しても、先に述べたロスアンジェルス郡救済委員会の報告が「問題は、平均して、日系農民が他の耕作者よりも（メキシコ系労働者に対して）より厳しい条件と低い賃金を設定したことにある<sup>③</sup>」と指摘しているように、日系農民が、集団として、他の少数派集団の労働者の労働条件をむしろ悪化させたと考えられる。農業労働者達が、ストライキの対象として、ロスアンジェルス郡の全日系農民のみを対象とした事実が、日系農民の利害の共通性と団結を物語っている。

エスニシティを基礎とした団結を背景に、当初は白人農民が期待したように、日系農民は強硬に組合の承認を拒否した。一九三六年のストライキが勃発した時、南加農会連盟の指導のもとに各地に農民の組織の代表が集まり、組合拒否の姿勢を貫くことを決議した。南加農会連盟の加藤新一支配人は、農民達が戦い続けられれば、必ず組合を潰すことができると繰り返し彼らに保証したのである。日系新聞によると、日系農民は組合に対する極めて素朴な恐怖心をもっていた。一旦組合を認めれば、農民は完全に組合の支配下におかれ、理不尽な要求によって農業が続けられなくなるであろうといった投書が多数掲載されたのである。<sup>④</sup>

とりわけ、「青年義勇団」を結成した各地域の二世の組織は積極的であった。ロスアンジェルス郡においては、二世人口は一九三〇年において一五三一〇人であり、一世の一五八四〇人とほぼ同数となった。しかしながら、二世人口のうち一四三二〇人は二〇才以下であり、二世の政治的な発言がようやく聞かれるようになったもののその声はまだ小さかった。ロスアンジェルスでは、ようやく日系市民協会の支部の会員数が二百人内外に達したところである。<sup>⑤</sup>ところが、このストライキに関しては、各地域で「青年義勇団」などと名付けられた、日系農民を援助する二世の組織化が目立った。全米日系市民協会のロスアンジェルス支部は、農村ばかりでなく都市部の二世に呼びかけて、スト破りの労働力を供給するための組織化を促進した。『加州毎日』はストライキで困難な状況にある地域の農民に労働力を提供する「義勇団」を「大和民族特有の国民性」と賞讃している。しかし、「アメリカ合衆国の政府と人民が共産主義を受け入れない限り、アメリカ市民である二世は共産主義の影響を許すことは出来ないし、しないであろう」という日系市民協会の声明にもみられるように、二世はこのストライキを共産主義の策謀と断定し、むしろ彼らの「アメリカニズム」を示す絶好の機会だと考えたのである。<sup>⑥</sup>

しかし、ストライキが長引き、範囲が拡大するにつれて、このようなエスニシティを基礎とした団結にひびが入り始めた。七月には白人農民の目にも明らかほど日系農民の間の対立が表面化していた。農家協会のある会員の手紙は次のよ

うに報告している。「日系の野菜栽培農家は組合（メキシコ人や他の労働者の）と悪い条件で賃金に関する同意をした。これは重大なことである。彼らは、農民達がひどく分裂しているので、再組織するために一息つく暇が必要だったと弁解している」<sup>⑦</sup>。と。一九三六年五月ごろからの『加州毎日』と『羅府新報』の二大日系新聞間の感情的ともいえる対立も、背景に日系農民の間の軋轢があった。単なる派閥争いではなく、『羅府新報』は南加農会連盟の立場を代弁しており、『加州毎日』<sup>⑧</sup>は二点の相関連する問題に関して南加農会連盟の指導者を批判する運動を展開したのである。

第一の批判は組織上の問題である。日本移民コミュニティの組織の大部分は、地域的な小さな組織がより広い範囲の組織に連合されるという形で州単位の組織にまで到達していた。南加農会連盟も各々の地域、生産物を単位とする小組織の連合体であった<sup>⑨</sup>。そのため、日系農民の第一の帰属意識は地元の小組織にあり、このストライキのあいだ、上層指導部は必ずしも末端組織を完全に掌握出来なかつたのである。ストライキが長引くにつれて、日系農民の間に指導者の高圧的な方針に対する不満が募っていった。加藤支配人が南加農会連盟の強硬方針は全農民の総意であると強調したが、『加州毎日』の藤井整備編集長は、南加農会連盟の方針が地域の状況を無視しており、各地域に問題解決は任せろべきであると主張している<sup>⑩</sup>。また、日本人農園労働者組合も、各地域の農民の組織は、独立して交渉に当ることを希望していると指摘していた。「地方耕作者組合にては直接交渉した向きもあり且つ二十四仙乃至二十八仙支払うの意志さへ見えるに農連当局者は何故に交渉談義の機会を作ってくれぬのかこの点吾々は甚だ諒解に苦しむものである」<sup>⑪</sup>、と。

この地方対中央の対立は、同時に、南加農会連盟の指導者達と、小借地農との対立の表面化を意味していた。一九三三年のストライキと一九三六年のストライキの大きな違いは、労働力の供給量にあった。一九三三年には、労働力は過剰供給であったが、一九三六年には辛うじて需要に見合う程であったため、たとえ小人数しか雇用しない小農にとっても、ストライキの長期化は労働力不足を意味したのである。『加州毎日』は、六月には、「折角のクラブを風倒し多大の犠牲を払って迄も家族本意の農家となるか、或は地方的解決にいで不安状態を一掃すべきかとは真に痛痒を感じつつある農家の

声である<sup>⑬</sup>と指摘している。ストライキによる労働力不足に加えて、他の日系農家に対する労働奉仕と寄付は、小農にとって大きな負担となりつつあった。ハーバースティのある農業組合員は「あの当時の連盟の予算によると一ヶ月六千ドルの経費でユニオン対抗を続けるといふのだったがワシら小農はそんな負担はできん」と述べたという。また、「ストライキの際には別に時局費の負担をして其外に家軒別他地方へヘルプにいつたが吾々のごとき小百姓には仲なかヤリキレン。農連の会員たる間はやはりついて行かんと」という農民の声も紹介されている<sup>⑭</sup>。エスニシティを基礎とした団結が、一部構成員にとってはむしろ負担となったのである。

「わが『加州毎日』を敵視する態度はやがて小農の反感を買ふ<sup>⑮</sup>」と小農の代表を自認する『加州毎日』はこのような小農の苦境を論じるキャンペーンを行った。「ある小農民からの手紙」は、「ストライキに関し大農をヘルプするために小農者から時局費を募集することやまた小農が自分の仕事をよしてまで大農のヘルプに出かけることは公平でないと信ずる。もし大農がストライキに対抗せんとするなら自分達で其方法を講ずることが穩当である<sup>⑯</sup>」、と訴えている。藤井編集長は、「ストライキ事件のときでも小百姓が困っているに拘らず何処までも『頑張れ頑張れ』と指揮して小百姓を益々困らせて其裏面で彼ら大百姓は小百姓よりも高い給金を払って旨うまと味を占めている<sup>⑰</sup>」と批判した。また、藤井はすでに合意に達していたサンディエゴやオレンジ郡の農民と農業労働者との間の契約の内容を紹介して、日系農民の間にある組合に対する素朴な恐怖心を払拭しようとも試みた。組合承認よりもストライキがこれ以上引き延ばされることの方が農家にとって不利であると主張し、さらに、ストライキを有力な白人の労働組合が支持していることを指摘して、排日運動の再発を忌避するためにも組合を認める方向での早期解決を勧めたのである<sup>⑱</sup>。

結果として、日系農民の間の結束は維持できなかった。農家協会をはじめとする白人農民の反対や南加農会連盟の指導にも関わらず、日系農家のなかには、組合と個々に合意に達し、組合承認に踏み切るところがでてきた。先述のごとく七月迄には、三百八十五戸の農家が、農園労働に対して最低時給三〇セント、雇用労働者の六〇％は組合員とするという内

容で合意に達したのである。翌年の四月には、南加中央日本人会と労働者の代表との間で組合承認を含んだ契約が結ばれたことも既述の如くである。

ロスアンジェルス・セロリ・ストライキは日系農民のコミュニティを危機に陥れたといっても過言ではない。南加農会連盟の会長は八月に辞任したが、その時点でストライキ問題はいまだ解決していないという認識を示し、辞任理由の一つとして、「連盟が農家への全面的の支持と全面的結末を為し得ざりし責任を痛感す」と述べている。いくつかの地域の組織は、中央組織からの脱会を決議した。コンプトン、ハーバースティ、ローンデル、などガーデナ平原の六団体、オレンジ郡の農民組織、及びいちご農園組合が、異口同音に緊急基金と労働奉仕の過重負担を理由に脱会したのである。一方、南加農会連盟の指導者は、一部農民のユニオン承認が労働者側の態度の硬化を招いたと批判し、一九三六年の終りには、団結を乱すものは「日本人コミュニティの敵」であると各地域を説いてまわったのである。マックウィリアムスは、一九三〇年代の日系人社会を「小市民社会」であるとし、「実際にはただ一つの階級利益しか社会のなかに見いだされないという事実が、内部の団結を強めていた」とコミュニティの外側から観察している。しかし、コミュニティ内部に視点を置き換えてみると、指導者による「ただ一つの階級利益」の追及は、内部の団結をむしろ弱めたと言えるのではなからうか。

- ① 『羅府新報』一九三六・三・二六、五・一、五・二三、『加州毎日』一九三六・三・二六、四・二五。
- ② 『羅府新報』一九三六・十二・一。
- ③ Carey McWilliams, *Factories in the Field* (1939, reprint, Arno Books, 1969) p. 248.
- ④ 『羅府新報』一九三六・十一・三十、『加州毎日』一九三六・五・十九。
- ⑤ 在羅府日本帝國領事館「管内邦人人口統計表」(昭和五年十一月一日現在)(JARP)、『加州毎日』一九三六・七・十五。
- ⑥ 『羅府新報』(英文版) April 26, 1936; 『加州毎日』一九三六・四・二九、一九三〇年代の二世の動きに関して、米山裕「第二次世界大戦前の日系二世と『アメリカニズム』」『アメリカ研究』二十卷(一九八六年)参照。
- ⑦ 日付は一九三六年七月一〇日。LaFollette Committee, *Hearings*, pt. 55 (Jan., 1940) exhibit 8887 p. 20279.
- ⑧ 『加州毎日』に関しては、阪田安男、田村紀雄『炉端話』で農民の心をつかむ藤井整『東京経大学会誌』一四六号(一九八六年六月)参照。

- ⑨ Tolan Committee, *Hearings*, pt. 29, pp. 10975, 10980.
- ⑩ 『羅府新報』一九三六・五・四、『加州毎日』一九三六・八・十。
- ⑪ 『羅府新報』一九三六・四・三。
- ⑫ LaFollette Committee, *Hearings*, pt. 47 (Dec., 1939) p. 17472.
- ⑬ 『加州毎日』一九三六・六・十七。
- ⑭ 『加州毎日』一九三六・八・三十一、九・十一。
- ⑮ 『加州毎日』一九三六・九・二。
- ⑯ 『加州毎日』一九三六・五・三〇。
- ⑰ 『加州毎日』一九三六・八・五。
- ⑱ 『加州毎日』一九三六・五・二五、六・二九、八・二五。
- ⑲ 『羅府新報』一九三六・八・八。
- ⑳ 『加州毎日』一九三六・七・二〇、八・二五、八・三十一、九・十一、
- 『羅府新報』一九三六・八・八、十・一五、十・十九、十・二〇、十・一七。
- ㉑ 『羅府新報』一九三六・五・二九、十・十九、十・二四、十・二九、十・三十一。
- ㉒ ケアリー・マックウイリアムス、鈴木二郎・小野瀬嘉彦共訳、『アメリカの人種的偏見』（新泉社、一九七〇年）一四一頁。

## 結びにかえて

一九三六年のストライキは、カリフォルニアにおいて、文化及び政治問題だけでなく生活基盤に関する問題にもエスニシティが深く関わっていたことを明かにした。一九三〇年代の長引く経済危機とその結果としての労働争議は、エスニシティと階級の関係という、アメリカ社会史の底流に常に存在してきた問題を浮き彫りにしたのである。第一に、民族的団結という、いわば階級縦断的な解決方法でこのストライキに対処しようとした日系農業コミュニティにおいては、中央指導者——小借地農——農業労働者という階層分化が表面化した。とはいえ、一九三〇年代の日本における軍国主義の台頭がいやがうえにも日系人としての意識を高めていたという歴史的背景を考えると、この時期に日系コミュニティが分裂したと結論づけることは出来ない。むしろこのストライキが明かにしたことは、エスニシティの多面性であろう。例外的に集団志向が強いとされる日系人も、アメリカ社会における生活の基盤に関わる問題に関してはコミュニティの指導者や他の経済的階層の日系人との衝突を辞さず、自らの経済的利害を主張したのである。

第二に、一九三〇年代の経済的危機といえども、少なくともカリフォルニア農業においては、エスニシティの違いを超

越した階級意識を直接には生み出さなかった。日系農業コミュニティ内の各階層は、階層による亀裂が表面化した後も、あくまで日系人という枠組を行動の基礎としていた。メキシコ系、フィリピン系及び日系農業労働者にしても、エスニック・ユニオンを核とした上で他のエスニック・ユニオンとの一時的な連帯を目指したのであった。ニューディールを通じて作られた「連合」の枠外におかれた少数派民族集団の農業労働者や農民各階層は、大恐慌を乗り切るために、エスニシティに基づく絆に頼らざるを得なかったのである。

それは又、白人優越体制のなかで、民族或は人種の階層化を強化する皮肉な結果ともなった。労働者側も、雇用者側もエスニシティを行動の基盤としたことで、経済的対立が人種的対立にすり変わる危険性が高まったのである。日系農民は日系人としてまとまり、ときに白人より厳しい条件で他の少数派民族集団の労働者を雇用した。その結果、日系農民を対象とした争議が起こり、ヴェラルデは、「このストライキが長引くと、メキシコ人と日本人の間に、人種の憎悪がでてくる」と述べている。白人農家の日系農家に対する「支援」もまた、土地法強化を示唆するなど人種差別を手段とする支配の試みであったため、常に排斥に転じる可能性があった。それは、はからずも第二次大戦の勃発によって証明されることとなったのである。

① 『羅府新報』一九三六・五・二十二。

# The Los Angeles Celery Strike of 1936 and the Agricultural Community of Japanese Immigrants

by

MATSUMOTO Yuko

The Los Angeles celery strike was a struggle between desperate workers ethnic minorities and Japanese small tenant farmers who managed to survive during the the Great Depression. The economic crisis made small tenant farmers pay less to workers in comparison with larger farmers. In addition, white supremacy put Japanese farmers, most of whom were small tenant farmers, in a more precarious situation. Consequently, Japanese farmers employed agricultural workers in harsher conditions.

Against this situation, Mexican, Filipino and Japanese agricultural workers organized themselves into unions based on their own ethnicity. These ethnic unions cooperated with each other in a strike to demand better working conditions and the recognition of their unions.

Feeling the pressure of the white power structure, Japanese farmers followed the leaders of the Japanese agricultural community and took strong attitudes against the workers in the early stages of the strike. As the strike dragged on, however, it became difficult for each individual Japanese small farmer to maintain this strong attitude. Some of them made individual agreements with workers and recognized the union. Some local organizations quit the central organization of Japanese farmers.

Thus, an analysis of the strike illuminates that ethnicity acquired a deeper significance in Californian agriculture during the Great Depression. First of all, for agricultural workers, ethnicity was not obstacle for organization but became the basis of their unionization. Second, this strike demonstrates that power relations among minority groups made labor relations harsher and more complicated. Lastly, an analysis of this strike calls for a review of the "ethnic solidarity" of the Japanese agricultural community. The Japanese immigrants were not "exceptionally" cohesive. Japanese agricultural workers participated in the strike against Japanese farmers. Small tenant farmers could not follow the leaders of the community. In a word, the economic crisis sharpened the problem common to other ethnic groups: relations between ethnicity and class.